第21回ピースボート「旅と平和」エッセイ大賞　大賞受賞作品

農学という武器で創る、私の平和／田中翠さん（23歳）

大学で農学を専攻し、養蜂の研究に没頭する私にとって、ミツバチの巣箱を開ける瞬間は特別な意味を持っている。そこにあるのは、息を呑むほど完璧な調和だ。女王蜂、働き蜂、雄蜂。一匹一匹が自らの役割を全うし、花から蜜をもらい受粉を手伝うことで、他者を搾取することなく命を繋いでいく。彼らの世界は、私にとってひとつの「平和」の完成形である。

私がバックパックを背負い、実験室を飛び出して旅に出たのは、社会課題を解決するためなどという立派な理由からではない。ただ純粋に、ミツバチという生き物が好きだったからだ。国内では伊豆や四国、そして海を越えてベトナムやオーストラリアへと、各地の養蜂家を訪ね歩いた。気候も文化も全く違う土地で、人々がどのように蜂と共生しているのかを、ただこの目で見てみたかったのだ。

不思議なことに、伊豆の急斜面であっても、オーストラリアの広大な大地であっても、私が目にした光景に大きな変わりはなかった。どこへ行っても、そこには蜂の機嫌に一喜一憂し、移り行く花に心を寄せ、自然の恵みに深く感謝しながら働く生産者たちの姿があった。日焼けした無骨な手で巣箱を開け、黄金色の蜜を誇らしげに見せてくれる彼らの顔には、命を育む者としての絶対的な尊厳が宿っていた。しかし、純粋な好奇心で赴いたその旅の途中で、私は思いがけず世界の歪みに直面した。対話を重ねる中で、国境を越えて彼らの口からこぼれたのは、まるで示し合わせたかのような同じ悲鳴だった。

「養蜂を続けていくのは、本当に苦しい」

彼らを苦しめていたのは、自然の厳しさではなく、人間の社会が作り出したハチミツ市場の闇だった。現在、世界規模で深刻な問題となっているのが偽装ハチミツの蔓延である。その背後には、グローバルな貿易網を牛耳る人々がいる。彼らはシロップなどの安価な不純物を大量に混ぜ合わせた粗悪品を作り出し、さらには第三国でコンテナを積み替えて原産国を偽装するハニーロンダリングと呼ばれる不正を、国境を越えてシステマチックに行っているのだ。スーパーの棚に並ぶ安価なハチミツの裏側で、消費者が真実を知る術は巧妙に奪い去られている。

その結果、自然と真摯に向き合い、手間暇をかけて良質なハチミツを採る私が旅先で出会ったような小規模生産者たちが、圧倒的な資本による不当な価格競争に巻き込まれている。真面目な生産者ほど労働に見合った対価を得られず、次々と廃業や貧困に追い込まれていたのだ。

そこにはミサイルは飛んでこないし、銃声も聞こえない。しかし、巨大な経済システムと、消費者の無関心が、生産者の生活基盤を静かに、そして確実に破壊している。私はこれを、血の流れな

い「構造的暴力」だと捉えている。大学の講義で学んだ小規模生産者の経営は苦しいという活字の羅列が、伊豆で、四国で、ベトナムで、オーストラリアで出会った優しくて力強い人たちの生活が今、理不尽に脅かされているという生々しい怒りへと変わった瞬間だった。

この見えない暴力にどう立ち向かうべきか。平和とは、単に戦争がない状態を指すのではない。世界中で自然と向き合う人々が、巨大な力に搾取されず、「人間」として自立し、誇りを持って生きられるエコシステムを守ること。それこそが、本質的な平和の実現である。

私は、活動家のようにプラカードを掲げて街を歩いたり、大きな声で世界平和を叫んだりすることもない。しかしそれは平和に関心がないということではないのだ。私には、農学という確かな武器がある。

一つ目の戦い方は、ハチミツの「真正性評価」という科学の力だ。成分の精緻なデータ分析によって本物であることを証明し、消費者が本物の蜂蜜を選べるようにする。科学の力で、誠実な生産者の価値を正当に評価し、彼らを守る強固な盾を作るのだ。

二つ目は、生産者の手触りを直接消費者に届ける仕組みづくりである。私は現在、蜜蝋を用いたクリームのプロトタイプを作成し、ユーザーのフィードバックを集めながら事業化の道を模索している。生産物の価値を適正な価格で社会に届け、消費者に「誰がどうやって作ったのか」という背景を知ってもらうこと。このビジネスの実践は、消費者の「無知」という壁を壊し、巨大な貿易組織の搾取から生産者の経済的自立を守り、「見えない誰か」の顔を取り戻すための戦いである。

蜂が好きで飛び出したあの旅がなければ、私は漠然と農学を学ぶだけの、無邪気な学生で終わっていたかもしれない。旅先で出会った人々の顔と、「苦しい」という切実な声が、私に守るべきものをはっきりと教えてくれた。旅は、私に農学という武器を持って社会の暴力と戦うための、強烈な覚悟を与えてくれたのだ。

遠くの悲惨な戦争を一瞬で止める魔法は、今の私にはない。しかし、実験室で顕微鏡を覗き込み、ハチミツの真偽をデータで証明し続けるこの泥臭い営みは、確実にどこかの生産者の尊厳を守り、理不尽な搾取を食い止める力になると信じている。私のこれからの旅は、世界を飛び回るのではなく、自らの持ち場である研究室とビジネスの現場で進める旅だ。旅で出会ったミツバチたちの小さな羽音を守り、誰もが搾取されずに生きていける基盤を足元から支えること。それこそが、旅を通して見えない暴力の存在を知った私が、貢献することのできる平和である。